巻頭言

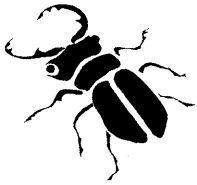
保育者の暖かさ

千羽喜代子

女学生の頃、「理想の女性像」という宿題を与えられたとき、聖書の創世記の中のリベカを挙げたことを記憶している。

この箇所を要約しよう。

主人アブラハムの命を受けた一人のしもべは、アブラハムの子イサクの嫁探しの旅に出かけ、ある願いをもって井戸の側に伏せていたとき、娘リベカが水がめを肩にのせ、泉に降りて水がめを満たし、上がってきた。しもべは走り寄って、「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませてください」と乞う。するとリベカは、「お飲みください」と言って、急いで水がめを自分の手に取りおろして、しもべに飲ませ、飲ませ終った後、「あなたのらくだにもみな飲ませ終るまで、わた



しは水をくみましょう」と、再び水をくみに井戸に走って行き、すべてのらくだのために水をくんだのである。その間しもべは、主が彼の旅を祝福されるか、どうかを知ろうと、黙ってリベカを見つめていた、という物語である。

有名な箇所であるので読者の多くは記憶しておられる方もいられると思うが、水を乞うたしもべだけでなく、長旅をしてきたであろうらくだの渇きをも察して、十頭のらくだのために井戸から水をくみ上げるのである。女性にとってはかなりの重労働である。

リベカのやさしい心情に共感をおぼえたのであったが、何故か今回のテーマを「保育者の暖かさ」と題したとき、この箇所が再び思い出されたのである。

親の養育態度を云々するとき、一九五〇年代から一九六〇年代のはじめにかけて、まず親の態度を識別・測定し、つぎに、それを子どもの行動の特徴と関連づけようとする試みに多くの努力が向けられた。

例えば、R・シアーズらは、親の養育態度に二つの次元があること、すなわち、その第一の次元は、「暖かさ—冷たさ」であり、第二の次元は、「許容性—拘束性」であることを報告している。

この研究結果は、保育者と子どもとの関係にもあてはまるのではないかと考えていたが、一九九八年度の修士論文(大妻女子大学)のテーマに伊藤香苗が共感性との関連で取り上げた。いずれ発表の機会が得られると思うが、暖かさを「受容」、「共感」、「愛情」の包括概念と考え、まず、暖かさは何によってとらえることができるかを参与観察によって、エピソード記録を収集したのである。

この結果の詳細は省略するが、研究の始めに設定した、暖かさは人格特性としてとらえることができるのではないかとの浅はかな仮説を立証することができなかった。むしろ、次の理由によって

保育者と子どもとの関係性のなかで、保育者自身が作り出すものではないかとの結論に至ったのである。

その理由は、①暖かさを感じる行為は、乳幼児の気持ちや感じ方や言葉の受容及び体験の共有を通じての関わりにおいてとらえられること、②行為以外の要素としては、時間的経過の中での子ども理解、子どもの内面及び背景の把握、子どもに対する成長の喜び、成長への期待、見守る保育者の存在、これらの諸要素が関与していることを明らかにした。

O・F・ボルノウは、教育を支えるものを教育的雰囲気という概念で言おうとしている。それは第一に情感的であること、第二に教育する者と教育される者を包む包括的な気分であることと説明している。ボルノウ研究者のお叱りを受けるかもしれないが、「暖かさ」は、この教育的雰囲気に近い概念ではないかとも考えられる。

極めて荒い考え方であるが、暖かさが人格特性の一要素としてよりも、それは保育者と子どもとの関係性の中で、保育者自身が創り出していくものであるという結果に、何か救われた思いがしたのである。

親から一時の間ではあるが離れて生活する保育施設の場における乳児や幼児たちの寄りどころとなるものは、保育者との間にかもし出される暖かさの共感、心情的な関係である。

この保育者の暖かさを乳幼児たちは、どのような状況のもとに、どのようなかたちでとらえているのだろうか。

それは保育者の暖かさだけでなく親の暖かさにおいても然りである。

（大妻女子大学）